

|||||
原 著
|||||

看護師のプリセプターとしての役割意識

Nurses' Perceptions of The Role of Preceptor

佐藤 佳子¹⁾ 米澤 弘恵¹⁾ 荒添 美紀¹⁾

石綿 啓子¹⁾ 豊田 省子¹⁾ 大下 静香²⁾

Yoshiko Satoh¹⁾ Hiroe Yonezawa¹⁾ Miki Arazoe¹⁾

Keiko Ishiwata¹⁾ Shouko Toyoda¹⁾ Shizuka Oshita²⁾

1) 獨協医科大学看護学部

2) 上武大学看護学部

1) Dokkyo Medical University School of Nursing

2) Faculty of Nursing, JOBU University

要 旨 本研究の目的は、プリセプターを担うことになった看護師が、どのような役割意識もってかかわっているのかを明らかにすることである。

調査の対象者は、毎年30名前後の新卒看護師が就職する6病院で、マンツーマンのプリセプターシップを行った26名である。データ収集は、「プリセプターを指名された時の気持ち」「プリセプターとしての準備」から構成した半構成的質問紙による調査を行った。分析は、内容分析を行った。

その結果、【プリセプターを指名された時の気持ち】、【プリセプターとしてかかわっていく上での目標】、【かかわることへの心構え】、【プリセプターをするに当たっての準備】の4つのカテゴリーが抽出された。【プリセプターを指名された時の気持ち】では、「積極的な感情」をもった人が6名(23.1%)であった。一方、「消極的な感情」を持った人が20名(76.9%)で、プリセプターという役割に対して不安や心配などの消極的な感情をもっていた。【プリセプターとしてかかわっていく上での目標】では、「プリセプティとの関係性を築く」、「プリセプティにとって良いモデルを示す」、「協体制度の活用」、「プリセプティの達成度」の4つのサブカテゴリーになっていた。その中で最も多かったものは「プリセプティとの関係性を築く」であった。【かかわることへの心構え】では「自分とプリセプティとの関係性」、「かかわる時の態度」、「指導方法」、「プリセプティの評価」の4つのサブカテゴリーになっていた。【プリセプターをするに当たっての準備】では、個人的な準備として「文献学習」や「指導計画の作成」を15名(57.7%)が行っていた。

以上の結果から、プリセプターという役割に対して不安や心配などの消極的な感情をもっているも、かかわりや指導の方向性を見出していることが明らかとなった。しかし、プリセプターには戸惑いやストレスなどがあることから、プリセプターの意識を一人で貫くのは容易ではないことが示唆された。

Abstract

The aim of this research was to find out more about how nurses who acted as preceptors viewed their role. A survey of 26 nurses, who acted as preceptors on a one-to-one basis, was carried

out in six hospitals which take on around 30 new graduate nurses every year. A semi-structured questionnaire was used to find out about the nurses' feelings when chosen to be a preceptor and how they prepared for the role. The content of their replies was then examined.

Four categories were extracted from the results: *Feelings when selected as a preceptor*, *Aims in working as a preceptor*, *Attitude toward involvement*, and *Preparations for being a preceptor*. In the category of *Feelings when selected as a preceptor*, 6 nurses (23%) had "positive feelings" while 20 (76.9%) had "negative feelings," some with uneasiness or concern about taking on the role of preceptor. In the category of *Aims in working as a preceptor*, four subcategories were identified: "build a good relationship with the preceptee," "be a good role model for the preceptee," "work together to produce a good result," and "help the preceptee to make progress." Among these four subcategories "build a good relationship with the preceptee" was the most common. In *Attitude toward involvement* there were also four subcategories: "one's relationship with the preceptee," "manner during involvement," "guidance methods," and "evaluation of preceptee." In *Preparations for being a preceptor*, 15 nurses (57.7%) "studied the literature" or "prepared guidance plans."

The results showed that, despite some negative feelings of unease and worry about the role of preceptor, the nurses were able to find a direction for their involvement and guidance of preceptees. However, the fact that the preceptors felt confused and stressed suggests that it is not easy for individual nurses become accustomed to the mindset of a preceptor.

キーワード：プリセプター プリセプティ 役割意識 かかわり 臨床経験年数

Key words : Preceptor, preceptee, role perception, involvement, years of clinical experience

1. はじめに

プリセプターシップとは、新卒看護師のリアリティショックを緩和し、職場に適應すること、看護学生から看護師への役割移行の促進を目的とし、一人の新卒看護師（プリセプティ）に対して一人の先輩看護師（プリセプター）がつき、ある期間マンツーマンで教育指導を行うことである¹⁾。日本でも1980年代に導入され²⁾、2000年度の看護職員需給状況調査では、3,286施設のうち1,763施設で取り入れられている³⁾。

プリセプターシップの先行研究では、新卒看護師のリアリティショックの緩和⁴⁾、プリセプターの成長や学び⁵⁾といったプリセプターシップの有用性を示すものがある。一方で、看護師はプリセプターという新たな役割を得ることで、その役割行動に対して戸惑い⁶⁾、プリセプターとして指導する能力の不足や指導方法について

悩み⁷⁾⁻⁸⁾、また、看護師としての知識や技術、経験の不足によるストレスの憎悪⁹⁾⁻¹²⁾などがあり、プリセプターの役割を担うには大きな負担を強いる現状がある。

このようなプリセプターという役割の重責が長く続けば、バーンアウトにつながりやすいことが考えられ、この状態の回避にはプリセプターをサポートする体制の整備が必要である。プリセプターをサポートする体制の整備については、スタッフ一人ひとりが役割を意識した協力体制の整備や管理職からプリセプターへの配慮、同期からの支援などについて研究されている¹³⁾⁻¹⁶⁾が、看護師のプリセプターの役割意識では、プリセプターになる前の負担感¹⁷⁾を研究したものしか見当たらない。看護師がプリセプターとして、どのような役割意識を持ってプリセプティにかかわっているのか、その役割意識

を把握することは、プリセプターの役割を実践していく中でサポートしていく際の示唆に繋がると考える。

以上のことから、本研究では看護師がプリセプターの役割をどのように意識しているのかについて検討した。

2. 用語の定義

本研究における用語を以下のように定義する。
プリセプターシップ：

一人のプリセプティ(指導を受ける側のこと)に対し、一人のプリセプター(担当者)が、1年かけてマンツーマンで臨床の教育を担当する方法。

プリセプター：

一人の新卒看護師にかかわり、1年後の成長に向けて、技術的な指導をはじめ、さまざまな指導を行い、新卒看護師が統合的に患者を看護できるようにかかわる先輩看護師。指導者や教師的な役割。

プリセプティ：

担当の先輩看護師より、看護技術などの指導を受けながら、臨床家としてさまざまな体験をしていく新卒看護師。

役割意識：

プリセプターの役割は、教育者、相談者(支援者)、業務内で確実に新卒看護師が成長・発展できるようにモデルを示すことと、新卒看護師が新しい役割の中で社会に適応した確実な目標を持つようにすること¹⁸⁾とされているが、その役割を認識し、思考する心の動き。

3. 研究方法

1) 研究協力への依頼

F県内3施設、T都内3施設の合計6施設の看護部長に、書面並びに口頭にて本研究の趣旨、方法、施設並びに研究協力者の匿名性やプライバシーを遵守することを説明し、看護部長へ5名前後のプリセプターの紹介を依頼した。対象となるプリセプターには、各施設の看護部長より本研究の趣旨を伝えていただき、本研究への協力の意向を確認の後、対象者の連絡先を伺っ

た。対象者には、研究者より連絡を取り、口頭にて研究の趣旨、参加の自由並びに途中辞退の自由、プライバシーの遵守を説明し、研究への協力を依頼した。さらに、面接時に改めて書面および口頭にて再度説明を行い、協力を依頼した。研究は、承諾を得た後に実施した。

2) 研究対象者

プリセプターシップを導入後、数年が経過し、毎年30名前後の新卒看護師が就職する病院で、F県およびT都における6施設を対象とし、各施設の看護部長より紹介された33名のうちマンツーマンのプリセプターシップを行った26名を対象とした。

3) データ収集期間

2003年6月23日～8月28日

4) データの収集方法

面接の内容は、プリセプターとしての役割意識を〈プリセプターを指名された時の気持ち〉〈プリセプターとしての準備〉から構成した半構成的質問紙を用いて行った。

面接によるデータ収集は、対象者のプライバシーが遵守される施設内の個室、および不規則な勤務を考慮し、本人の指定した場所で行った。

面接内容は、対象者の許可を得て録音し逐語録とした。

5) データの分析方法

面接時に録音したテープの逐語録からプリセプティへの関わりを語っている文脈を抽出し、内容の類似性により帰納的に分類・カテゴリ化した。分析の過程では継続教育の専門家にスーパーバイズを受け信頼性の保持に努めた。

6) 倫理的配慮

対象者には文書を用いて研究の趣旨、参加の自由並びに途中辞退の自由、プライバシーの遵守を説明し、同意書を得て本研究への協力を得た。面接はプライバシーを遵守できる場所で行った。調査した結果は匿名性に配慮しコード化した。なお、本研究は福島県立医科大学倫理委員会の承認を経て実施した。

4. 結果

1) 対象者の特性(表1)

(1) 所属

対象の所属は、F県内において13名、T都内において13名の合計26名であった。

(2) 年齢と性別

対象者の年齢と性別は、26歳未満が14名(53.8%)、26歳以上が12名(46.2%)で、男性3名、女性23名であった。

(3) プリセプターシップに関する研修の受講有無

プリセプターシップに関する研修を受講した人が21名(80.8%)、受講していない人が5名(19.2%)であった。8割以上の人を受講していたプリセプターシップに関する研修とは、各施設内において継続教育の一環として実施されているものであり、看護協会等で行っている研修を受講していた人はいなかった。また、研修の実施時期については、プリセプターの役割を担う前の年度に行われる施設もあれば、プリセプターの役割と並行して研修が行なわれている施設もあった。プリセプターシップに関する研修を受講していなかった5名については、施設内の研修として位置づけられたものではないが、病棟単位での勉強会は行われていた。

(4) 臨床経験年数、およびプリセプターの役割を担った病棟での勤務経験年数

臨床経験年数は、5年未満が17名(65.4%)、5年以上が9名(34.6%)であった。また、プリセプターの役割を担った病棟での勤務経験年数では、1年目が1名(3.8%)、2年目が1名(3.8%)、3年目が10名(38.5%)、4年目が8名(30.8%)、5年目が3名(11.5%)、不明が3名(11.5%)で、3、4年目の看護師が多かった。

(5) 看護基礎教育課程

プリセプターが卒業した看護基礎教育課程では、看護系大学が3名(11.5%)、看護系短期大学が2名(7.7%)、看護専門学校が20名(76.9%)、進学課程が1名(3.8%)、不明が1名(3.8%)で、7割以上が看護専門学校を卒業していた。

2) プリセプターとして指名された時の気持ち(表2)

【プリセプターとして指名された時の気持ち】

表1 対象者の属性

1. 所属	F県	13名
	T都	13名
2. 年齢	26歳未満	14名(53.8%)
	26歳以上	12名(46.2%)
3. 性別	男性	3名(11.5%)
	女性	23名(88.5%)
4. プリセプターシップに関する研修の受講	あり	21名(80.8%)
	なし	5名(19.2%)
5. 臨床経験年数	5年目未満	17名(64.5%)
	5年目以上	6名(34.6%)
6. プリセプターをした配属病棟での勤務経験年数	1年目	1名(3.8%)
	2年目	1名(3.8%)
	3年目	10名(38.5%)
	4年目	8名(30.8%)
	5年目	3名(11.5%)
	不明	3名(11.5%)
7. 卒業した看護基礎教育課程	大学	3名(11.5%)
	短期大学	2名(7.7%)
	専門学校	20名(76.9%)
	進学課程	1名(3.8%)
	不明	1名(3.8%)

とは、対象者がプリセプターを担うことを上司などから伝えられた時に、その役割について感じた気持ちを示している。表2に示したように、その役割について感じた気持ちでは、「消極的な感情」を持った人が20名(76.9%)、「積極的な感情」を持った人が6名(23.1%)であった。

「消極的な感情」とは、自分の知識の不足や看護技術に未熟なところがあるために、プリセプターとしてプリセプティにモデルを示していくことへの苦痛や不安、プリセプターとしての教え方や、どのように教えていけば良いのか分からないことから「教える」ということに自信を持たず、自分に指導を任されることへの不安や心配であった。また、プリセプターとしてプリセプティを任されることに対して、周囲のスタッフから期待されているという責任の重さへの不安、プリセプティを一人前にするという目標を自分が達成させることができるかという心配もみられた。さらに、自分がプリセプティと人間関係を築いていかれるのかというようなプリセプティとの相性に関する不安や心配、自分自身がまだ新しい職場へ配属されたばかりである上にプリセプターの役割も担うということへの不安や心配、プリセプティと自分との年齢差に対する不安や心配などがみられた。

一方、「積極的な感情」とは、プリセプターという役割を、自己成長の目標とし、自分に自信をつけるチャンスといったキャリアアップと捉えていることを示している。加えて、自分も勉強できる時期という受け止め方や、師長の評価

として頑張るという意欲的なものもみられた。

3) プリセプターとしてかかわっていく上での目標 (表3)

【プリセプターとしてかかわっていく上での

表2 プリセプターを指名された時の気持ち

カテゴリー	人数	理由
消極的な感情	20(76.9%)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の知識が不足している ・自分の看護技術が未熟である ・モデルになることが苦痛 ・教えるだけの自信がない ・どう教えていけば良いか分からない ・指導を任されることが不安 ・プリセプティを一人前にする目標を達成できるか心配 ・周囲からの期待に責任がある ・プリセプティとの相性が心配 ・新しい病棟へ配属されたばかりで心配 ・プリセプターの指名の前触れがなく突然で心配 ・プリセプティと自分との年齢の差があるから心配
積極的な感情	6(23.1%)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に自信をつけるチャンス ・自分の看護師として成長する上での目標の一つ ・プリセプターを経験することによって看護師として一人前 ・自分も勉強できる時期だから頑張る ・師長から評価されたから頑張る
合計人数	26(100%)	

表3 プリセプターとしてかかわっていく上での目標

カテゴリー	記録単位数	内容
1. プリセプティとの関係性を築く	30 (71.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・親近感を持たせる ・一番近い存在としてかかわる ・できるだけ会話をして深くかかわる ・聞きやすい雰囲気を作る ・話しやすい雰囲気を作る
2. プリセプティにとって良いモデルを示す	8 (19.0%)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のプリセプター (自分が指導を受けた先輩看護師) のようにモデルを示す ・自分がプリセプター (自分が指導を受けた先輩看護師) に求めたことを行なう
3. 協力体制の活用	2 (4.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ・困った時にはスタッフに相談する
4. プリセプティの達成度	2 (4.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ・6ヶ月くらいには独り立ちして一人として見てもらえるようにする
記録単位数総数	42 (100%)	

【目標】とは、プリセプターという役割を引き受けた後、プリセプターとしてかかわっていくために自己が掲げた目標である。この目標は、表3に示すように「プリセプティとの関係性を築く」、「プリセプティにとって良いモデルを示す」、「協力体制の活用」、「プリセプティの達成度」の4つが抽出された。その中で最も多かったものは「プリセプティとの関係性を築く」という目標であった。

「プリセプティとの関係性を築く」では、プリセプターがプリセプティは学生時代と臨床現場とのギャップに悩むであろうと考え、プリセプターである自分に親近感が持てるように、プリセプティにとって一番近い存在、頼れる先輩としてかかわれることである。また、プリセプターは、プリセプティとできるだけ会話をすることによって、プリセプティが聞きやすい雰囲気を作ることや、話しやすい雰囲気を作ること、自分とともに一緒に頑張っていこうという姿勢を相手に伝え、メンタル的なフォローをも含めて深くかかわっていくことであった。

次に多かったものでは、「プリセプティにとって良いモデルを示す」という目標であった。これは、プリセプター自身が新卒看護師時代に指導してもらったプリセプター（自分が指導を受けた先輩看護師）の影響が大きかったと述べ

ており、自分が指導を受けた先輩プリセプターのように指導できることを目指していた。自分が新卒看護師時代に先輩プリセプターに求めたことを、今度はプリセプティに指導していくといった自分の経験を基にしたものであった。

また、抽出された記録単位数としては少なかったが、自分がプリセプターとして困った時には、スタッフに相談するという「協力体制の活用」を目標としたものや、プリセプティが入職後6ヶ月頃には独り立ちして、周囲のスタッフに一人の看護師として見てもらえるようにするという「プリセプティの達成度」を目標としているものもあった。

4) かかわることへの心構え（表4）

【かかわることへの心構え】とは、自分がプリセプターとしてかかわるために定めた目標を遂行していくための心の準備を示す。この心構えには表4で示すように、「自分とプリセプティとの関係性」、「かかわる時の態度」、「指導方法」、「プリセプティの評価」の4つが抽出された。

「プリセプティとの関係性」については、プリセプティに教える時（仕事でかかわる時）とプライベートでかかわる時を区別し、仕事でかかわる時には1年目の看護師としてかかわり、看護の楽しさを伝えながらもプリセプターとして

表4 かかわることへの心構え

カテゴリー	記録単位数	内 容
1.自分とプリセプティとの関係性	22 (35.5%)	・教える時とプライベートは区別する ・1年目としてかかわる ・自分を通していろんな部分を吸収させる ・プリセプティが持っている人間性を活かす ・人間的に成長できるように応援する
2.かかわる時の態度	19 (30.6%)	・平常心で仕事をしているところを見せる ・自分が問いかけをしたら聞くだけのゆとりを持つ ・基礎を教える
3.指導方法	19 (30.6%)	・プリセプティの成長に合わせる ・プリセプティが自分で根拠を考えられるように指導する
4.プリセプティの評価	2 (3.5%)	・できないところはできないなりに、良かったところは良かったなりに褒める
記録単位数総数	62 (100%)	

プリセプティがもっている人間性を活かしながら、自分を通していろんな部分を吸収させ、人間的に成長できるように応援していくことだった。

「かかわる時の態度」では、プリセプティには患者とのかかわりを通して自分の仕事に対する態度や取り組み方を示しつつ、自分自身もプリセプターとしてプリセプティにかかわれるようプリセプティの問いかけに答えられるだけのゆとりをもち、プリセプティばかりでなく自分自身も基礎や根拠に戻った上で教えようとしたなどの心構えを見出していた。

「指導方法」では、プリセプティの看護師としての成長に合わせて、プリセプティ自身が自分で根拠や目的を考えられるよう励ましながら指導していくことや、看護を嫌いにならないような言葉かけを意識して指導していた。

抽出された記録単位数は、これら3つのカテゴリーに大部分が集中していたが、プリセプティのできていないところは注意し、良いところは褒めるという「プリセプティの評価」に対しての心構えも少数ではあったが示された。

5) プリセプターをやるに当たっての準備 (表5)

【プリセプターをやるに当たっての準備】では、約8割の対象者がプリセプターシップに関する研修を受講していたが、研修以外にもプリセプターはプリセプティを指導するために個人的な準備をした人が15名(57.7%)と約6割いた。特に準備をしなかった人は11名(42.3%)で約4

割は個人的には準備をしていなかった。準備をした人たちは、表5に見られるように「文献学習」や「指導計画の作成」などを行っていた。

「文献学習」とは、プリセプティに指導を行なうために、プリセプターシップに関連した記事が掲載されている看護雑誌を読んだり、自分の知識で不明確な部分について資料や病棟の指導マニュアルなどを活用して再確認していた。また、過去に自分がプリセプター(自分が指導を受けた先輩看護師)から受けた指導について、当時の記録を振り返るなどしていた。

「指導計画の作成」では、プリセプティの1年間の指導を年間の指導計画として作成していた。

一方、準備をしなかった対象者の中には、プリセプターの指名が直前に決まったから何も準備していない、いつの間にか決まっていたから何も準備しなかったと述べた人もいた。

5. 考察

1) プリセプターを担う時期

プリセプターは、臨床経験年数3~4年目が最も多く17名(65.4%)であった。プリセプターの選考基準について、臨床経験年数を中根ら¹⁹⁾は2年~4年、木内²⁰⁾は2年~5年と示していることから、本研究の対象者も先行研究に一致しており、プリセプターの役割を担っている看護師の多くは、臨床経験年数は3~4年目が適任時期ではないかと考える。

プリセプターを指名された時の気持ちでは、不安や心配という消極的な感情が多く示された。これには2つのことが考えられた。1つ目には、

表5 プリセプターをやるに当たっての準備

カテゴリー	内 容
1. 文献学習	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の知識を資料で振り返る ・看護雑誌を読む ・病棟の指導マニュアルを確認する ・過去に受けた指導を振り返る
2. 指導計画の作成	<ul style="list-style-type: none"> ・年間の指導計画を作る
3. 何も準備しなかった	<ul style="list-style-type: none"> ・直前に決まったから何も準備していない ・いつの間にか決まっていたから準備していない ・準備らしい準備はしなかった

看護師としての経験年数の不足に伴うことである。臨床経験2～3年目の看護師には責任が過負荷である²¹⁾と報告されているように、年齢が25歳以下、臨床経験年数が3～4年目の看護師が多かったことが考えられた。また、臨床経験年数が2～3年目の看護師は、長期的目標や計画を立てて意識的に自分の活動を行うようになる段階にあたり、この時期に自分もっている概念や理論をさまざまな実践の状況を通して、それに磨きをかける必要がある²²⁾とも言われている。このことから、この時期は、ようやく病棟での勤務にも慣れ、自分を看護師として自覚し、自立して自分の看護に取り組むことができる時期であり、1～2年目で習得した知識や看護技術をこれから発展させていく時期にあると言えるであろう。しかし、プリセプターとなる看護師は、このような時期にプリセプターという新たな役割が加わり、看護師としてまだまだ成長途上にある未熟な自分を感じながらもプリセプティのモデルを務めなければならないことへの不安と苦痛であることが明らかになった。したがって、プリセプターの不安と苦痛は、消極的感情として受け止めるのではなく、役割を遂行しようという意識の現われとして捉えることができる考える。

2つ目には、指導を任されることに伴うものである。臨床経験年数2～3年目の看護師は、臨床経験年数的に新卒看護師に近く、その気持ちに共感することができるということから「プリセプター」として望ましいと考えられている¹⁾。しかし、先行研究²³⁾にもあるように、単にプリセプターという役割が、プリセプティの気持ちに共感するばかりでなく、プリセプティが一人前の看護師になれるよう指導しなければならないという役割も課せられているため、自己の経験年数からはその責任は重圧となっていることが推察された。

2) プリセプターとしてのかかわることへの思い

表3～5で示したように、プリセプターとしてのかかわるために自己の目標や心構え、そして

自己学習を行っていた。その中でも、プリセプティとの人間関係を築いていこうとしていた。これは、プリセプターシップがマンツーマンで行われることから、自分が一番近い存在としてプリセプティを理解し、職場に適応させたいという思いの現れでないかと考える。人間関係は、初めの印象だけで決まるものではなく、言葉や行動を通してのやり取りを続けていくうちに相手をより深く理解していく²⁴⁾ことができるということから、自分のプリセプターの指導を受けた体験を思い出すことで、その時自分がどのような行動をとっていたのかということが指針となっていることが推察される。そして、プリセプティのありのままを受け止めていこうとしていると考えられた。

また、プリセプターは自分がかかわってもらった先輩看護師のことを思い出しながらプリセプティにとって良いモデルを示そうとしていた。これは、プリセプターが自分自身の先輩看護師から学んだ患者とのかかわり方や、仕事に対する態度や取り組み方が、看護実践や看護観に大きく影響していることが推察できる。人は、ある事柄が危険である場合に、その活動をどのように行うかを示す有能なモデルが与えられれば、初めてのことで誤りを犯さずに習得することができる²⁵⁾と言われている。良いモデルが示す行動の影響は大きいことが示唆された。

これらのことから、プリセプターはプリセプティが初めて経験する事柄について、自分がモデルとなって、一つ一つ一緒に経験していくことの重要性が明らかとなった。

3) プリセプターとしての役割意識

プリセプターという役割に対しては、臨床経験年数の不足や指導を任されることから不安や心配などの消極的な感情をもっていたが、目標の立案やプリセプターとしての準備することによって、プリセプターとしての思いを抱き、かかわる方向性を見出していた。これは、自分がかかわってもらった先輩看護師を振り返ることで、自分をプリセプターとして明確にすることができ、目標の立案に至ったと推察される。し

かし、意欲がなければ環境が整っていても適切な効果は認められない²⁶⁾とされているが、これは先輩看護師を振り返ったことにより、専門職としての意識が芽生えたのではないかと考えられる。本調査対象者では、プリセプターの役割意識が芽生えていたが、芽生えていない場合には、プリセプターは戸惑いやストレスなど⁵⁾⁻¹²⁾の困難がある中、その意識を一人で貫くのは容易ではないだろう。そのプリセプターの意識のサポート体制を整備することが課題である。

6. 結論

1) プリセプターを指名された時に、プリセプターという役割に対して不安や心配などの消極的な感情をもっていても、目標の立案やプリセプターとしての準備を行いかわりや指導の方向性を見出していることが示唆された。

2) プリセプターとしてのかかわりや指導の方向性を見出しても、プリセプターには戸惑いやストレスなどがあることが明らかことから、プリセプターの意識を一人で貫くのは容易ではないと考える。そこで、そのプリセプターの役割意識をサポートできる体制を整備することは重要であることが示唆された。

7. 謝辞

本研究にご理解いただき、貴重なお話をしてくださりましたプリセプターの皆さんを始め、ご配慮くださいました各施設の看護部長さまに心より感謝いたします。

(本研究は、福島県立医科大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を加筆、修正したものである)

参考文献

- 1) 吉井良子：プリセプターシップとは何か，看護展望，17(5)，p 529-533，1992.
- 2) 後藤桂子：新卒看護婦のリアリティショック対策としてのプリセプターシップ，看護，11(6)，p 589-591，1986.
- 3) 國井治子：「卒後臨床研修」必要化に向けた検討，看護，54(5)，p 36-39，2002.

- 4) 平賀愛美・布施淳子：新卒看護師とプリセプターのリアリティショックに関する認識の相違，日本看護研究学会雑誌，28(3)，p 208，2005.
- 5) 小倉幸子・大室律子：プリセプターの学びと成長に関する研究，日本看護学教育学会，第11回学術集会，p 122，2002.
- 6) 鳴海広子・草刈淳子他：プリセプターシップのペアリングにみる「ニード」と「援助」のズレに関する研究，日本看護研究学会雑誌，21(3)，p 259，1998.
- 7) 高野祐子・松村恵子：プリセプターの職場の環境がストレスに及ぼす影響，日本看護研究学会雑誌，23(3)，p 293，2000.
- 8) 鈴木奈緒子：意識調査を活かしたプリセプターシップ，臨床看護，28(4)，p 481-488，2002.
- 9) 里田佳代子・今里とみ子他：プリセプターのストレス認知とコーピング，日本看護学会第32回看護管理，p 132，2001.
- 10) 鈴木奈緒子・渡邊里香：プリセプターとプリセプティ支援者との意識のずれからみたプリセプターシップにおける課題，日本看護学会論文集，看護教育32号，p176-178，2001.
- 11) 坂口恵美子・児玉佳代子他：プリセプターの役割達成感に関連する要因，日本看護研究学会雑誌，21(3)，p 258，1998.
- 12) 太田祐子・小川久貴子他：看護学部教員の大学病院におけるプリセプターシップ支援のあり方に関する研究（その2）－プリセプターの職業ストレスの追跡－，日本看護学教育学会誌，13，p 202，2003.
- 13) 前田雅美・芳賀佐和子：プリセプターシップに関する検討－プリセプターの役割行動と支援体制の調査より－，日本看護研究学会雑誌，28(3)，p 209，2005.
- 14) 日沼千尋・諏訪茂樹：プリセプター支援に関する研究（その2）－プリセプター制度に関するプリセプターの認識－，日本看護学教育学会誌，第16回学術集会，p96，2006.
- 15) 増渕美恵子：プリセプターが周囲の者に受

- けた支援と期待する支援, 日本看護管理学会誌, 5(1), p 160-161, 2001.
- 16) 大津志津子: プリセプターシップにおけるサポーターの効果的な介入について, 日本看護学会誌, 15(2), p 97-103, 2006.
- 17) 西川京子・向井章子: プリセプターの負担感の調査ープリセプターになる前の負担感ー, 日本看護学会論文集, 看護管理34号, p 48-50, 2003.
- 18) Louise Bain: Preceptorship: a review of the literature, Journal of Advanced Nursing, 24, p104-107, 1996.
- 19) 木内妙子・関根早苗: 我が国におけるプリセプター制度の普及動向と今後の課題ー1986年から1996年の報告研究論文を対象にー, 東京都立医療技術短期大学紀要, 10, p 205-212, 1997.
- 20) 中根薫・出羽澤裕美子他; プリセプターシッププログラムの現状分析ープリセプターの支援体制に焦点を当ててー, 日本看護管理学会誌, 4(2), p 46-53, 2001.
- 21) 海老澤陸・小川久貴子他: プリセプターの支援に関する研究 (その1)ー初めてのプリセプターを経験する意味ー, 日本看護学教育学会, 第16回学術集会, p 96, 2006
- 22) Patricia Benner: From Novice to Expert, Addison-Wesley Publishing Company, 1984. 井部俊子訳; ベナー看護論, 医学書院, p 18-19, 1992.
- 23) 原美鈴・太田祐子他: プリセプターの支援に関する研究 (その3)ープリセプターの蓄積的疲労徴候ー, 日本看護学教育学会, 第16回学術集会, p 97, 2006.
- 24) 稲越孝雄・川上善善郎: わかりあう人間関係, 福村出版, p 60-75, 1996.
- 25) Albert Bandura: Social Learning Theory, General Learning Corporation, 1971.
原野広太郎・福島脩美訳; 人間行動の形成と自己抑制ー新しい社会的学習理論ー, 金子書房, p 23-50, 1980.
- 26) 倉戸ツギオ・鈴木直人他: 学ぶ教えるかわるー自己教育力をはぐくむ教育行動の心理学ー, 北大路書房, p 115-126, 1995.